

若さと情熱の讃歌『眺めのいい部屋』

A Room with a View as a Hymn to Youth and Passion

坂 淳 一 Junichi SAKA

序

『眺めのいい部屋』(*A Room with a View*, 1908年)は、20世紀イギリスの小説家 E.M.フォースター (Edward Morgan Forster, 1879-1970年) 初期の代表作である。イタリアを舞台とする第一部、イングランドを舞台とする第二部に分かれ、全20章で構成されている。さらに各章には副題があって、その章のテーマが提示されており、構成から見てもメッセージ性から見ても、なかなか複雑で、よく考え抜かれた作品と言ってよい。研究者の関心は、後の大作『ハワーズ・エンド』や『インドへの道』に集中しがちであり、様々な研究書を見ても『眺めのいい部屋』に関する掘り下げは必ずしも深くはないが、この作品の物語り構造に関してはインドの研究者 Y. プラサードの論考¹⁾ が優れており、登場人物の心理洞察に関しては L. トリリングが²⁾、作品の中の象徴的表現の解明に関しては N. メッセンジャーが優れている³⁾。

大らかな生命の讃歌としての『眺めのいい部屋』の魅力は、同性愛を扱った問題作の『モーリス』にも通じるものがある。『ハワーズ・エンド』『インドへの道』のような、階級や人種といった社会的問題を前面に打ち出した作品とは異なる、もっとプライベートな特質の作品であると言えよう。だからといって文学的な価値が低いと断ずるのは狭量に過ぎるのであって、『眺めのいい部屋』には、他の作品にはない率直で若々しい思想が表現されている点を看過すべきではない。以下に、長編小説作品の出版年等をまとめておく。

長編小説

『天使も踏むを恐れるところ』

Where Angels Fear to Tread (1905年)

『ロンゲスト・ジャーニー』

The Longest Journey (1907年)

『眺めのいい部屋』

A Room With A View (執筆 1903~8年、出版 1908年)

『ハワーズ・エンド』

Howards End (1910年)

『インドへの道』

A Passage to India (1924年)

『モーリス』

Maurice (執筆 1913~14年、1971年死後出版)

『眺めのいい部屋』は、主人公ルーシー・ハニーチャーチが、ジョージ・エマソンとセシル・ヴァイズという二人の男性と係わり合いながら成長してゆく物語である。

しかし単純に出来事が起きて物語が進展してゆくだけではない。一つ一つの出来事の持つ象徴性がルーシーの心に刻み込まれ、心の殻が破れたり、また新たな殻を着せられたりしながら、最後は自由な女性として解放されてゆく姿が描かれている。つまり、外面的な出来事の流れの下に象徴の連鎖という伏流があり、それがこの物語に厚みと重層性を与えているのだ。本論では、トリリングとメッセンジャーの研究を参考にしながら、主要な出来事の象徴性を掘り下げることで、「若さと情熱の讃歌」というこの作品の特質を浮き彫りにしてゆきたい。

1 第4章の殺人事件までのルーシーとジョージ

この最初の部分では、まだ生きることをどう捉えてよいのか分からない、いわば素材としてのルーシーとジョージが我々の前に提示される。ペンション・ベルトリニで、眺めの良くない部屋をあてがわれたことでもめているルーシーとシャーロットに、ジョージの父親エマソン氏が部屋の交換を申し出たことで二人の係わり合いが始まる。しかしこの時点では、二人ともまだ言わば保護者付きの半子供であって、

部屋の交換を声高に主張するのはジョージの父親、それを頑なに断るのはルーシーの従姉のシャーロットで、当人達はほとんど口を挟むことも出来ず、起きている事をどう評価してよいのかも分からず、ただ当惑している。結局はビーブ牧師が仲立ちとなって再度部屋の交換の申し出があり、「まあ、シャーロット・・・部屋を交換していただきましょうよ。あの人は心から親切にしてくださっているんだわ」(p.31、26 頁)というルーシーの希望によって、部屋の交換が実現する。シャーロットは相手が育ちの良い人たちだと思ったので関わり合いを避けたかったのだが、ルーシーの世間知らずによってここに身分違いの両者の関係が成立するのである。シャーロットはジョージのことを、物語の終わり近くまでついに認めようとしなが、社会のしきたりもまだよく分からず、従って変な先入観もない若い二人は、関わりが生まれたことを素直に認めている。特にジョージは嬉しそうでさえある。

食事を終えて、立ちあがった時、ルーシーはふたりのほうを向き、小さくぎこちないお辞儀をした。

父親のほうはそれを見なかったが、息子は気がつき、お辞儀を返す代わりに、眉を動かして微笑んだ。まるであいだに挟まっている何かを透かして微笑んでいるような、そんな笑みだった。

(p.27、18-9 頁)

ルーシーはお辞儀をし、ジョージは眉で微笑み返すというの、両者が属している階級の差を反映したようなやりとりであるが、ともあれ偏見も曇りもない関わりが両者の間に成立したわけである。ジョージは心が通うと目元で笑うという癖があり、後にはルーシーの母親のいたずらな一言に反応して、「ジョージ・エマースンの眼が笑った。ジョージと母親はかなり気が合うのではないかとルーシーは思った。」(p.171、266 頁)という一節などもある。これはジョージが相手を認め、相手の言動を嬉しく思ったことの印である。

そして部屋を交換してみると、ジョージの部屋には大きな疑問符「？」が書かれた紙が貼ってあった。「僕はまず『疑問符』から始めたのですが」(p.171、

266 頁)と後にジョージ本人が言っている、あの人生に対する疑問符である。ジョージはこの時点では、「あいつが何を悩んでいるのかは判っている。なぜ悩むのかは判らんが」(p.47、52 頁)と父親が観察しているように、人生に対する抽象的煩悶に閉じ込められているのである。なぜ彼が悩むのかはどこにも述べられていない。本人にも分からないのであろうが、トリリングはジョージの症状を「世紀末の神経症的なペシミズムに囚われている」⁴⁾ 状態だと説明している。第 12 章でサマーストリートに引越してきたエマースン家の荷物にはショーペンハウエルとニーチェの本があることから、このトリリングの指摘は正しいことが分かる。

一方のルーシーも、「彼女の魂は飢えていた」(p.26、16 頁)という状態でありながら、誰かが教えてくれなくては、歩くべき道も芸術の価値も自分では分からない。何かを求めているが、何を求めているのかは分からず、自分では答えを見出せない半子供である。

この二人が、イタリアでの共通の体験を通じて人生を一步前に進めることになるのである。

2 第 4 章の持つ意味

第 4 章ではシニョリーア広場での殺人事件があるのだが、一人フィレンツェの町を歩くルーシーは、自分の飢えた魂を持て余している状態である。

牧師の機知やミス・アランの示唆に富んだお喋りも、心の底から楽しんでいただけではなかった。会話というものは退屈だった。何かもっと大きなものが欲しかったのだ。路面電車のデッキに立って風に吹かれれば、その気宇壮大なものに巡り会えると信じていた。(p.60、74 頁)

そのような心境で町を歩きながら、かつてシャーロットに教えられた、自分では事を成さず男性が事を成す手助けをして生きる「中世風のレディー」なるものについて考え、自分はそうはなれないし、なりたくもないと考えている。そしてポッティチェリの「ヴィーナスの誕生」その他の絵画の写真を買う。この絵は裸体が描かれているからという理由で

シャーロットには買わないようにと言われていたものだった。これは象徴的に彼女の潜在願望を表現している。つまり肉体性への憧憬ないし衝動のようなものである。シャーロットによって、あるいはイギリス的慣習によって禁じられている人間の肉体面への関心が、彼女の自由を求める心情と一体となって現れているのである。その直後のシニョリーア広場では、次のような描写もある。

彼女はなんとなく物足りない気持ちでヴェッキオ宮殿の塔を見上げた。塔は薄闇の中で粗く仕上げられた黄金の柱のように見えた。それはもはや塔ではなかった。地に支えられているのではなく、静かな空で脈打つ、決して手の届かない宝玉だった。(p.62、77 頁)

欲求不満の彼女の前にそそり立つこの塔が男性器の象徴であることは、メッセンジャーの指摘⁵⁾を待つまでもないだろう。この作品は 1903 年から 1908 年にかけて執筆されているが、その直前の 1900 年にシグムント・フロイトの『夢判断』も出版されており、すでに深層心理学への関心も高まりつつあった時代であった。この塔の描写は彼女の白昼夢に現れたファルスである。しかし文脈から考えても、男性を求めての欲求不満というよりは、自分には許されていない自由な生、あるいは肉体性への漠然たる憧憬を表すものである。先ほど買った女性の裸体画である「ヴィーナス誕生」と対をなし、後にルーシーとジョージが結ばれることを予感させる象徴でもある。「ヴィーナス誕生」がルーシーとどのように関係するのかは後に論じる。

さて裸体画とファルスが来て、そして殺人が起きる。生と死が激しく交錯する。彼女は気を失って倒れる。するとジョージ・エマースンが抱きとめる。生と死、そして愛がここですべて現実のものとしてその荒々しい姿を現すのである。この事件によって、ジョージ・エマースンは彼女を愛するようになる。それまで彼の中で抽象的な思索の対象だった生が、具体的な目標へと変わったのである。彼は言う。「途轍もないことが起こった。狼狽えず、正面から考えなければならない。ひとりの人間が死んだというだけではない」(p.64、82 頁)そしてこうも言

う。

「こんな事件って簡単に起こるものなのですね。でも人はすぐにまたもとの生活に戻るのでしょう」

「僕は戻らない」

当惑し、彼女は尋ねた。

ジョージ・エマースンの答えは謎めいていた。

「僕はたぶん生きたいのだと思う」

(p.66、84 頁)

ジョージは死を目の当たりにして、自分は生きたいという実感を得たのである。そして自分が生に目覚めたその時、腕の中にはルーシーがいた。「運命を崇めたがるジョージ」(p.227、363 頁)が、それを偶然ではなく必然と見なしたと考えても無理な解釈ではないだろう。彼は細かい説明はしないが、後にルーシーに向かって、「あの男が死んだ時から僕は君が好きだった。君がなくては生きていけない。・・・僕は生きたかった。喜びの手掛かりを掴みたかった」(p.187、292 頁)と言っている。ジョージにとって、ルーシーは生きるのに不可欠な喜びの手掛かりとなったのである。一方のルーシーにとってジョージは何なのか、それはまだルーシーには分かっていない。しかし全体として、この事件によって、二人は生きることの現実に関心を持って直接向き合った。そこには父親のエマースン氏もシャーロットもいなかったことが重要である。この二人が、初めて自分で生と死の荒々しい現実に向き合ったのである。しかも偶然の導きによって、二人で一緒にであった。それはすなわち作者の意図によって、ということである。そして次のように、二人の人生は同時に一步前進する。

人生に何かが起こった。ふたりは個というものが現れる状況にやってくる。子供時代が枝分かれし、情熱に彩られた青春へと変わる場所にいた。(p.66、84 頁)

そして次なる事件、「情熱によって彩られた」出来事、すなわちジョージによる第一のキスが始まる。

3 第一のキス — 若さと情熱の第一の儀式

ビーブ牧師、イーガー牧師、ミス・ラヴィッシュ、ミス・バートレット、ルーシー、そしてエマースン親子という奇妙な取り合わせで遠出に出掛けるのが第6章である。ルーシーはミス・ラヴィッシュ、ミス・バートレットと一緒にいたが、大人の会話の邪魔だということで追い払われてしまう。イーガー牧師を捜して片言のイタリア語で「良い人たちはどこ？」(p.87、120頁)と馭者に尋ねると、馭者は勘違いをして彼女をジョージのところへ連れて行く。彼女は灌木の森を歩いて行き、突然地面がなくなって、斜面を2メートルほど落ちる。「光と美とが彼女を包んだ。彼女が落ちたところは花が咲く細い棚地で、一面、堇に覆われていた。」(p.88、122頁)馭者が斜面の上から「勇気と愛」と呼びかける(p.88、122頁)。

その声に彼女は返事をしなかった。地面は彼女の足元から急勾配で広々とした景色のほうへ下っていた。堇が小川となり、川となり、滝となって斜面をなだれ落ちていた。木々の根のあたりで渦巻き、窪みでは池となり、芝のあちこちを紺青の泡で飾った。とはいえ、下のほうではそれほどまで氾濫していなかった。この棚地が堇の源だった。地上を潤すべく美を噴出す泉だった。

その縁に立っていたのは、良い人だった。これから飛びこもうとしている水泳の選手のように立っていたのは。だが、その良い人は彼女が探している良い人ではなかった。それにひとりだった。

ジョージ・エマースンはルーシーが転げ落ちた音を聞いた。つかの間、彼はルーシーを凝視した。まるで天国から落ちてきた人を見るように。彼はルーシーの顔に輝くような喜びの色を見た。堇が青い波になってルーシーの白いドレスの裾を洒っていた。ふたりの上方の藪が閉じた。ジョージ・エマースンがルーシーに駆け寄った。そしてキスをした。(p.89、122-3頁)

このシーンについては、メッセンジャーの見事な解説がある。⁶⁾メッセンジャーによれば、ここでルーシーは、自らがボッティチェリ作「ヴィーナ

ス誕生」のヴィーナスとなって、堇の海の中に立っているのだという。第4章でルーシーが「ヴィーナス誕生」の絵を買うシーンが挟まれていたことを考えれば、この解釈は妥当なものである。少し補足すれば、「ふたりの上方の藪が閉じた」というのは、二人で波にのまれたようなイメージである。あるいは「ヴィーナス誕生」でヴィーナスが乗っている帆立貝の殻が閉じたようなイメージだとも捉えられよう。

どちらにせよ、二人は恐ろしく輝かしく、そしてプライベートな瞬間を迎えている。ジョージがルーシーに駆け寄ってキスをしたのは、この描き方からすれば極めて自然に見える。散歩の途中で出会ったルーシーに、ジョージが突然キスをしたのではない。それは外面的な状況である。このシーンの象徴的な意味は、愛の女神ヴィーナスとしてのルーシーが目の前に現れ、ジョージを見て「輝くような喜びの色」を浮かべたので、彼は愛の招きに情熱をもって素直に応じたということである。彼は愛と情熱が招くとき、心にブレーキを掛けるようなものを持っていない。この点において、後に述べるセシル・ヴァイズと正反対の人物である。はるか後に、「この人は・・・これまで愛情というものにたいして異義を唱えたことがないとルーシーは思った」(p.171、267頁)という一節があるが、このルーシーの洞察は正しい。ジョージは、父親のエマースン氏から次のような教えを受けて育ったのである。

「わたしはあいつに教えたのだ・・・愛を信じろと。わたしは言った。『愛が生まれたら、それが真実なのだ』わたしは言った。『情熱は人を盲目にするものではない。違う。情熱こそ正気だ。おまえが愛する女は、お前が本当に理解するただひとりの人間なのだ』」(p.217、344頁)

ジョージ・エマースンは、父親エマースン氏の教えを忠実に体現している人物である。この作品は、かなり寓意的側面の強い登場人物が多いが、ジョージもまたしかりである。

また、『イメージ・シンボル事典』⁷⁾によれば、堇(violet)には「春の再生、愛」などの象徴的な意味があり、このシーンでの堇は水の代わりである

が、水（water）も「大地母神とほとんどの母神のエンブレム」であり、「精神的再生と新生」を表し、「若返らせ『眠れる者』を目覚めさせ、・・・回復させる水」であると解説されている。ヴィーナスも元来は大地母神に由来する女神であるから、水はルーシーのエンブレムであると言ってもよいだろう。彼女は "Lucy" と呼ばれているが、それは "Lucia" の愛称であり、その語源はラテン語の "lūx" すなわち「光」である。彼女にいきなりキスをしたジョージは、愛と若さと光とをつかみ取ったのである。それは彼の情熱が成せる技であった。

彼女はその後、もう一度水辺に現れた女神になっている。第9章「芸術作品としてのルーシー」においてである。ただし今度の場面はルーシーの家の近くの池（ルーシーが言うところの「聖なる湖」（p.126、189頁））であり、一緒にいる男性はルーシーを芸術作品として見るセシルである。彼女もかつてはそこで水浴びをしたという刺激的な告白もなされており、彼女はこの池の女神とも言える。しかしジョージがイタリアの董の海で彼女をとらえたようには、セシルは彼女をとらえられない。許可を得てキスをし、キスの最中に鼻眼鏡がよじれ、それは失敗に終わるのである。「誰とも親密にはなれない男」（p.185、290頁）であり、禁欲主義に囚われた男である（p.106、154頁）セシルは、愛と若さと光の女神を手に入れることは出来ない。彼の本質が彼女の本質とかけ離れている上に、愛と若さに最も必要なものである「情熱」が彼にはないからである。ぶざまなキスの後で、セシルはこう思う。

これが抱擁だろうか。失敗だと思った。確かに失敗だった。情熱は圧倒的なものだ。礼儀や思慮、洗練に必要とされる要素のすべてを忘れさせるものだ。なんといってもお願いなどすることではない。自分はどのように労働者や工夫のように、いや、店のカウンターの向こうにいる男たちのようにできなかったのだろうか。（p.127、191頁）

セシルのこの痛々しい問いに対する答えは、「闇の人々は情熱や真実を断罪しているので、いくら努力して徳を積んでも、結果は虚ろなものでしかない」（p.194、304頁）ということである。

4 「聖なる湖」での戯れ — 若さと情熱の第二の儀式

人生を疑問符でスタートしているジョージが、第12章でルーシーの弟であるフレディーから、例の「聖なる湖」に水浴びに行こうと誘われる。そしてフレディーとビーブ牧師、ジョージの3人で連れ立って水浴びに行く。第9章で、セシルがルーシーにキスしようとしてぶざまな結果に終わった場所である。シャーロットに見つかって禁じられるまでは、ルーシーも水浴びをしていた場所である。ジョージには何が起きるか。

一番始めに裸になって水に飛び込んだのはフレディーであった。

「水は好いなあ」飛沫を上げながら池に入ったフレディーが言った。

「水は水だ」ジョージが呟き、髪をまず濡らし興奮していない証拠だった—まるで彫像ように無表情で、あたかも石鹸の泡に満たされた風呂桶か何かに入るように無頓着に、彼は美しい池の縁に足を浸した。筋肉は使うべき、身体は洗うべき、ただ単にそう思ってでもいるように。ビーブ牧師はふたりを見守った。それから柳蘭の綿毛が、まるで歌劇団のようにふたりの頭の上で、舞っているのを見た。

「プハー、プハー」フレディーは四方に二掻きずつ泳ぎ、葦の葉や泥を身体に着けていった。

「そんなに気持ちいが好いのだろうか？」水に洗われる草の上にまるでミケランジェロの彫像のように立ったジョージが疑問の言葉を口にした。

足元が崩れた。ジョージはその疑問を深く考える暇もなく、池のなかに落ちた。

（pp.148-9、228頁）

水が好いものかどうか、ジョージはまたしても疑問符で考えようとしている。エマースン氏がルーシーに、「あなたがフィレンツェを出ていった時はひどいものだった」（p.219、347頁）と言っているように、彼はルーシーに去られて闇の中に戻ってしまっていたからである。しかし命の神は、彼に考える暇を与えない。かつて第4章でルーシーが董の海に落

ちた時と同じように、地面が崩れてジョージも水に落ちる。つまり二人は同じように、母なる大地の導きで若さと命の水による洗礼を浴びるのである。

三人の紳士は『神々の黄昏』のニンフよろしく、胸までの深さの池をぐるぐる泳ぎまわった。雨が清々しさを運んできたせいだろうか、それとも太陽が栄光の熱を注いでくれたせいだろうか、それともふたりが若く、もうひとりの心が若かったせいだろうか、・・・三人は遊びはじめた。ビーブ牧師とフレディーは水を掛けあった。そして少し速慮しながらジョージにも水を掛けた。彼は黙っていた。ふたりは彼を怒らせたのかと思った。その時、不意に内なる若さが爆発した。ジョージが笑った。彼はふたりめがけて飛びかかり、水を掛け、沈め、蹴りあげ、泥だらけにし、池の外に追いだした。(pp.149-50、229 頁)

こうしてジョージは疑問符を捨てて、内なる若さに身を任せて生命を爆発させる。ジョージが笑ったということに注意する必要がある。彼はこの状況を認めたのである。また、「太陽が栄光の熱を注いでくれた」というところにも注目したい。この象徴的な太陽は、後に論じるテニスに関する場面でも重要な役割を果たしている。『イメージ・シンボル事典』で見ても、太陽の象徴的意味は多岐に渡っているが、「2 繁殖をもたらす熱、光、万物を治療し、回復させるもの」という定義に注目したい。これは先ほど引用した水の象徴的意味とほぼ同じである。この作品では、水も、太陽も、「再生、回復」のシンボルであり、ジョージが失われた生命力を回復する三つの場面、すなわち第一のキスの舞台となった葦の海、今検証しているこの聖なる湖、そして次に検証するテニスの場面は、すべて水か太陽の光に恵まれた場所なのである。

こうしてすっかり元気が出て、池の外に出て走り回り、裸のままビーブ牧師の帽子だけをかぶって叫んでいたジョージは、散歩して来たルーシーとミス・ハニーチャーチ、セシルの三人にその姿でぶつたり出くわしてしまう。かつて葦の海にヴィーナスのように現れたルーシーの目の前に、今度は聖なる湖のほとりに立つミケランジェロのダビデ像のよう

なジョージが現れたわけである。このように、二人はお互いに対して肉体的な愛の象徴としての存在感を示し合う。逆にセシルは、池から女性二人を遠ざけようとする。

「こっちへ、早く」とセシルが指図した。セシルは自分は女を導くものだし、女を守るものだといつも思っていた。どこに導くのか判らないし、何から守るのかも判らなかったのであるが。

(p.151、231-2 頁)

騎士道精神を発揮したつもりで、女を守る男を演じているのである。男は女を守るものというのは、男女分業を旨とするヴィクトリア朝以来の社会通念である。例えば、ヴィクトリア朝を代表する美術評論家のジョン・ラスキンは、男女の役割について次のように述べている。

さて両者の特質は次のとおりです。男性の力は行動し、前進し、保護することにあります。彼は本質的に、行動と進歩の人、創造者、発見者、擁護者です。・・・ところが女性の力は戦うことではなくて統治することであり、その知性は発明的でも創造的でもなくて、全体的に快い秩序、調和、決定に向いています。・・・彼女の大きな役割は賞賛です。彼女は戦いには加わりませんが、確固たる公正さをもって、戦いの栄冠を授けます。その役目と地位によって、彼女は危険と誘惑から守られています。⁸⁾

ラスキンばりの退廃主義的美術通であることを気取るセシルは、ラスキンの提示する男女観通りに行動したと言えよう。しかし、あわてて服を拾ったジョージは、改めて三人の前に立ちあがる。

「こんにちは」ジョージが叫んだので、御婦人たちは、また立ち止まることになった。

彼は自分では服を着たつもりだった。ジョージは裸足で、胸をはだけて、満面に笑みを浮かべて、子供のような顔をして、うっすらと暗い松の森を背にして立っていた。(p.152、233 頁)

かつてルーシーも水浴びをした「聖なる湖」で子供のようにはしゃぐジョージと、逆に湖からルーシーを遠ざけようとする（すなわちシャーロットと同じように慎みを強制する）セシルとの、鮮やかな対比が見られる。水が若さと命の象徴であるというこの作品の文脈から考えれば、(かつてのルーシーと同じように) ジョージは喜んでその洗礼を受け、セシルはルーシーを若さと命から引き離そうとするのである。このふたりの内面性の違いをルーシーの面前で浮き彫りにすることがこの章の役割であり、それは第15章と第16章の、テニスを巡るエピソードに受け継がれてゆく。

5 テニス — 若さと情熱の第三の儀式、そして第二のキス

第15章において、フレディに誘われたジョージがテニスをしにハニーチャーチ家にやって来るが、それに先立ってルーシーとミセス・ハニーチャーチ、シャーロットとビーブ牧師が教会に行く途中でエマースン親子に会う。

そこでミセス・ハニーチャーチがジョージの言った言葉に感心して、こんなやり取りが交わされる。

「まあ、エマースンさん、あなた、なんて賢いんでしょう」

「賢い？」

「あなたはこれからどんどん賢くなっていきますよ。ばかなフレディーにあんなことを教えてくれないければ好かったのに」

ジョージ・エマースンの眼が笑った。ジョージと母親はかなり気が合うのではないかとルーシーは思った。

「いいえ、僕が教えたんじゃないですよ。僕が教わったのです。あれが彼の哲学なんです。彼は人生をあんなふうにはじめたのです。僕はまず『疑問符』からはじめたのですが」

(pp.170-71、266頁)

この会話で、ミセス・ハニーチャーチが「あんなこと」と言っているのは、聖なる湖での水浴びのことである。ルーシーがフィレンツェを去ってから再

び人生を疑問視していたジョージに、人生を肯定する態度を、今度は弟のフレディが教えたのである。そしてミセス・ハニーチャーチに対しても、ジョージは眼で笑った。彼はこの母親が気に入ったのだ。

さて、家に戻ったルーシーに、セシルは次のように聞く。

「ああ、僕の庇護する人たちは元気だった？」セシルが訊いた。彼は親子に対してほんとうに関心を持ったことはなく、教育のためにウインディー・コーナーに連れて来ようと決心したこともすでに忘れていた。

「庇護する人たちですって」彼女は少しむっとして言った。

セシルの意識にある人間関係はただひとつで、守る人と守られる人という封建的なものだった。彼女の切望する僚友的な関係には眼もくれなかった。(p.173、269-70頁)

こうして、次第にルーシーとセシルの間の距離は広がってゆく。「守る人と守られる人」という観念は、「聖なる湖」で裸で泳ぐジョージに出くわしたシーンでもセシルが見せていたものであった。ルーシーは僚友的な関係を望んでいる。そしてセシルとの破局が決定的となるのはテニスを巡る出来事からである。

ジョージがハニーチャーチ家に着いたときにはルーシーがピアノを弾いていたが、いつの間にかジョージが部屋に入って聴いていることに気付いたルーシーは、落ち着いて演奏が出来なくなる。そして、次のようなやり取りになる。

「僕はテニスのほうがいいな」フレディーが、断片的な演奏にうんざりして言った。

「わたしもそのほうがいいわ」ふたたびピアノの蓋を閉めて彼女が言った。「男子ダブルスができるわね」

「そうしよう」

「僕は遠慮するよ」と、セシルが言った。「せっかくの試合を壊してはいけないからね」

いくら下手でも人数を合わせるのが心遣いだということを、セシルはぜんぜん理解していなかった。

「そんなこと言わないで、セシル。僕も下手だし、フロイドだって下手だよ。たぶんエマースンだって」

ジョージが訂正した。「僕はそんなに下手じゃない」

みんなは白い眼で見た。「それならなおのこと、僕は遠慮する」とセシルが言い、ジョージに刺々しい態度をみせているミス・パートレットが加勢した。「ヴァイズさん、そのほうがいいわ。テニスをしないほうがいいですよ。ほんとうに」

(p.174、271-2 頁)

そして結局、フレディー、フレディーの友人のフロイド、ジョージ、そしてルーシーの4人でテニスをするのである。この4人が喜んでプレイし、闇の人々であるセシルとシャーロットは拒否していることから、ここでのテニスが情熱的な行為であり、光の世界の人々の行為であることが示唆されている。テニスボール (tennis-ball) を『イメージ・シンボル事典』で引いてみても、「1 若さを表す：フランスの皇太子は、ヘンリー五世がフランスの公国の領有権を主張するのは、彼が若いからであると考えて、彼にテニスボールを送った(『ヘンリー五世』7,2)」とある。ここでのテニスは、「聖なる湖」での水浴びと同様、若さと情熱の祭典とも言うべきものなのである。ジョージはもちろん本気でテニスをする。それも並大抵の情熱ではない。

ジョージがサーブをした。彼の勝ちたいという意欲に彼女は驚かされた。・・・いま、彼は生きたいと思っている。テニスに勝ちたいと思っている。太陽の下で懸命に立っている。彼女の瞳の中に輝く、傾きはじめた太陽の下で。そして彼は勝った。

(p.175、273 頁)

生きることとテニスに勝つことは、ここでは半ば同義語である。真剣にルーシーに挑みかかり、相手は女だからなどと遠慮はせず、ルーシーと僚友的に対峙するジョージの姿がある。そしてここでも太陽が祝福するように熱を注ぐのである。この太陽の意義については先ほど論じた。

「聖なる湖」での水浴もテニスも、ジョージは全

身全霊で取り組み、セシルは決して参加しようとはしない。ミス・パートレットもその点ではセシルと同じである。しかし、ルーシーはどちらも自ら行っているのである。彼女もまた、若さの側、命の側に立ちたいのであって、慎みや淑女らしさのために情熱を捨てたくはないのである。それどころか、試合に勝ったジョージとの間に次のようなやり取りがある。

「君は負けるのが嫌い？」

彼女はいいえと言いかけて、負けるのが嫌いなことに気がついてびっくりした。そこで、彼女は「ええ」と答えた。

(p.176、274 頁)

ルーシーも勝ちたいと願っている。それは情熱に従って生きたいということである。自分で驚いているが、彼女はジョージと同じ情熱を持っている。

その後、テニスが一試合終わったところで、セシルがミス・ラヴィッシュの書いた小説を読んで聞かされたために、イタリアでの出来事の描写を聞いたジョージがまたルーシーにキスをするという出来事が起こる。

一度目のキスは、フィレンツェでルーシーが土手の上から落ち、まるで生まれたてのヴィーナスのように葦の海に立っていたときに行われた。二度目のキスは、若さと情熱の祭典であるテニスの後である。セシルが「聖なる湖」のほとりで水辺に女神のように立つルーシーにキスをしようとしたときは、失敗に終わった。それは本人が反省しているように、彼には情熱がないからである。それに対して、ジョージは生きたいという情熱に目覚め、「喜びの手掛かり」であるルーシーに強い愛情を抱いている。その情熱が、彼をしてキスという行為に走らせるのである。これも外面的には単なるキスかも知れないが、その象徴的な意義はもっと深いところにある。彼は繰り返しキスをすることで、情熱と肉体が求める愛の体現者となり、その意義を彼女に教えているのである。しかしこの時点では、ルーシーは闇の世界の使者シャーロットを同席させた上でジョージと言い争い、ジョージを拒否し(すなわち素直に情熱に従うことを拒否し)、ジョージを帰宅させてしまう。だがこの時にジョージが語った言葉の数々は、ルーシーの心に深く刻まれ、彼女の一部となる。後にルーシーは、そ

れらの言葉を使ってセシルを攻撃し、婚約を破棄する。つまりジョージになりかわって、セシルと戦ったわけである。

さて、ジョージが帰ったのち、そうとは知らず、フレディーがもう一試合しようとして、次のような会話になる。

「ルーシー、まだ明るいからもう一試合できるよ。エマースンも一緒に早く来てよ」

「エマースンさんは用事ができたのよ」

「なあんだ、がっかりだな。じゃあ、ダブルスを組めないよ。ねえ、セシル、テニスをしようよ、こいつのために。今日はフロイドの最後の日なんだ。僕たちとテニスをしようよ。あと一回だけなんだ」

セシルの声がした。「フレディー、僕は運動が苦手だ。君は今朝言っていたら、『本より他に能のない奴がいる』って。僕がそうだってことを認めるよ。だから君たちに迷惑をかけないようにしているんだよ」

ルーシーの眼から鱗が落ちた。自分はどうして一時でもセシルに我慢できたのだろうか？彼はまったく耐えがたい人物だった。その夜、彼女は婚約を破棄した。(p.188、294-5 頁)

通常の意味では、人の都合も気持ちも考えない人であることがはっきりしたので婚約を破棄したということであるが、象徴的な意味では、セシルは若さと情熱の祭典に参加することをあくまでも拒否したからである。そういう人と自分は一緒にはいられない。セシルと居たのでは、ルーシーの若さと命は吸い取られてしまう。そのことを象徴的に表したのが、このテニスのエピソードの意味なのである。その意味で、セシルのテニスへの不参加は決定的な出来事であった。

6 エマースン氏の説得と第三のキス

しかしここまで来ても、まだルーシーは自分の心に正直になれない。ジョージの言葉も、セシルを攻撃し、婚約を解消する武器には使えても、自分の心を開く鍵としては、まだ恐ろしくて使えないのであ

る。しかし第 19 章において、ビーブ牧師の教会の書斎で、ルーシーは先に来て休んでいたエマースン氏と偶然に出会う。そしてエマースン氏の導きを受けるのだ。

第二のキスの事件の後で、ルーシーはシャーロットを同席させてジョージの求愛を拒絶した。その後のジョージの様子について、エマースン氏は、「あいつは後悔している。あいつは言っていた。あなたがああの従姉を同席させたのは混乱したからだ。心にあることをあなたは言っていないと」(p.217、344 頁)と述べている。ルーシーが心を開いていないことが、ジョージには見抜かれている。また、「あいつはだめになっていますしね」(p.218、345 頁)とか、「それにジョージも生きる意味などないと思うようになるだろう。これまでもすれすれのところで生きていた。ジョージは生きる意味などないと思いながら生きていく。人生が価値あるものとは思わないだろう」(p.219、347 頁)などと述べて、その後のジョージの意気消沈振りを伝える。人生を疑問形で始めたジョージが、ルーシーに出会って肯定形で人生をとらえ始めたのに、破局によって遂に人生を否定するようになってしまったのである。エマースン親子がサマーストリートを出てゆくのも、「あなたを見たり、あなたのことを聞いたりすることに耐えられないと、ジョージは言って」(p.220、348 頁)いるからだと告げる。これを聞いたルーシーは動揺し、自分はギリシアに行くからそちらが出てゆく必要はないと話す。ここから、それでは誰と行くのかという話にならざるを得なくなり、ヴェイズ氏が一緒にでないことを話すことになる。彼女は婚約破棄を世間に公表する時のために用意したもっともらしい説明をするが、エマースン氏にはそのような嘘は通用しない。「お嬢さん、わたしはあなたが心配だ。わたしにはあなたが・・・自分を見失っているように見える」(p.222、352 頁)と、その説明が真実でないことはすぐに見破られる。そして次のように論ずる。

「・・・あの教会 [第 2 章のサンタ・クローチェ] のことを憶えているだろうか？わたしを煩わしがって見せてはいたが、じつはそうではなかったことを。眺めのいい部屋を断った時のことを憶えてい

るかな？あれが自分を見失ったということなのだ。些細なことだ。だが忌まわしい。いまのあなたがそうでないかと心配だ」 (p.222、353 頁)

彼が言う「自分を見失っている (in a muddle)」というのは、闇の世界に落ちている人の心の状態としてこの作品で繰り返し用いられる表現だが、「自分の本当の気持ちを押し殺して混乱している」ということである。本当は一緒にいて楽しいのに、煩わしがって見せるとか、本当は眺めのいい部屋が欲しいのに、要らない振りをするというようなことである。それは本心を捻じ曲げ、本当は愛していないセシルと婚約したり、本当は愛しているジョージを拒絶したりするという重大な過失にもつながる。だから些細なことだが忌まわしいのである。上記のような、本心よりも慎みある態度を優先し、欲しいものも欲しくない振りをするというのは、レディーのたしなみとしてシャーロットがルーシーに教え込んだことである。エマースン氏は「思っていることと言うことにまったく違いがない」 (p.29、20 頁) 人であるとビーブ牧師は評する。「善人であり、同時にうんざりさせる人物でもある。たぶん重要な問題について、わたしとはことごとく意見が食い違うでしょうが。察するところ・・・あの人はあなた方とも違えますね」 (p.29、21 頁)

つまりエマースン氏はアッパー・ミドルクラスの英国人一般とは違うというわけである。しかしどう違うのかと言えば、労働者階級的であるとか、社会主義的であるとかいうよりも、「思ったとおりのことを言う」ところが違うわけである。逆に言えば英国人一般は、慎みやたしなみといったものにとられるあまり、「思ったとおりのことなど言わない」わけである。それが人々を、この作品で言うところの「闇の世界」へと追いやるのだ。フォースターは、ここで中流階級の英国人一般に見られるそういう態度を批判している。

第 19 章でエマースン氏に出会ったルーシーは、この「闇の世界」にいた。つまり嘘で固めた世界にいたのである。前の第 18 章でセシルに婚約破棄を宣言したルーシーであったが、せっかくジョージのセシル評を受け入れて彼を結婚に値しない男だと認めたルーシーであるのに、「ジョージを愛している」

という点だけは認めなかったのである。これによってルーシーは闇に落ちる。セシルに婚約を解消する理由を浴びせると、驚愕したセシルから、ルーシーは「・・・今夜は君は違う人間みたいだ。新しい考え方で、声さえも新しい」 (p.192、302 頁) と言われる。そして動揺する。

「わたしが誰か違う人に恋をしていると思っているのならそれは大間違いだわ」

「もちろんそんなことは思っていないよ。君はそんな女じゃないよ、ルーシー」

「いいえ、あなたはそう思っている。古めかしい考え方よ。昔のままのヨーロッパの考え方だわ。女はいつも男のことが頭にあるという。女が婚約を解消すれば、誰もが言うの。『ああ、彼女の心には誰かほかの男がいる。彼女はほかの男が欲しいのだ』って。胸が悪くなる。野蛮だわ。女は自由を求めて婚約を解消することはできないってわけね」 (pp.192-3、302 頁)

これは全くジョージによるセシル批判 (p.186、290-91 頁) の受け売りである。セシル攻撃の武器としては有効であるが、彼女が言ったのでは嘘である。彼女は自由を求めて解消するのではない。ジョージが欲しいのだ。この嘘によって彼女は自らを罠にはめる。ジョージを求めている振りをし続けねばならなくなるのだ。セシルには通用した嘘であったが、エマースン氏には通用しない。誰も言わない、ルーシー自身も認めない真実を、エマースン氏は真向から彼女に投げつける。

「それなのだ。それが言いたいことだ。あなたはジョージを愛している」長い前置きの後で、発されたその三つの言葉 ["You love George."] は大海の波のようにルーシーに押し寄せた。

「そうなのだよ」エマースン氏は論駁の言葉を待たずに話しつづけた。「あなたはあの子を全身全霊で愛している。明白に。疑いの余地なく。あの子が愛しているのと同じように。愛しているという以外にそれを表現する言葉はない。あなたはあの子がいるから、ほかの男と結婚しないのだ」

(pp.222-3、353-4 頁)

これに対して、ルーシーはセシルにしたのと同じ抗弁を行う。「何てことを・・・ああ、ほんとうに男の考えそうなことだわ。女はいつも男のことを考えていると思ってらっしゃいますね」(p.223、354頁)

しかし、エマースン氏はこんな紋切り型の台詞で説き伏せられはしない。彼にはルーシーの心の底が見えている。彼は真正面から切り返す。「だが、あなたはそうなのだ」(p.223、354頁)

彼はルーシーに、ジョージと結婚すべきである、愛をすべて心から取り出して捨ててしまうことは出来ない、と説得する。そして愛というものの性質について説く。

「詩人たちがこのことも言えばいいのにといつも思うのだが、愛は肉体に属するものなのだ。肉体そのものではないが、その一部なのだ。ああ、それを認めさえすれば不幸はなくなるのに。ほんの少し率直であれば魂が解放できるのに」

(p.223、355頁)

これがこの作品の一つの真髄と言っていいたいだろう。愛は肉体に属する。ボッティチェルリの「ヴィーナス誕生」でさえ裸体画だから買わないようにとシャーロットはルーシーに教えた。しかしジョージが何も言わずにルーシーにキスをしてきたように、愛は肉体が肉体を求める行為であって、それを認めなければ魂も解放出来ないのである。第4章でルーシーが「ヴィーナス誕生」の絵を買い、シニョリーア広場で塔を見上げていたときから彼女の心に燦っていたものを、エマースン氏ははっきりと言葉にし、それを肯定したのである。「魂がどのようにして来たのか、どこに行くのかは判らないが、魂は確かにある。そしてルーシー、あなたがその魂を荒廃させているのが、わたしには見える」(p.223、355頁)とあるので、必ずしも霊肉一元論とまでは言えないが、肉体の欲求に逆らえば、魂も荒廃するという考え方である。

エマースン氏は、別のところでも同様のことを述べていた。フレディーがジョージを水浴びに誘った第12章である。エマースン氏は男と女について次のように述べている。

「・・・男と女が僚友の関係になるのは確かです。ジョージもそう思っていますよ」

「御婦人を男のレベルまで上げるのですか？」と「ビーブ」牧師が訊いた。

「エデンの園ですよ」エマースン氏は階段を下りながら言いつづけた。「あなた方牧師はそれを過去のものとして位置づける。しかし、それはほんとうは未来のものなのです。肉体を軽蔑さえしなくなれば、わたしたちはそこに行けるでしょう」

エデンの園がどこにあるか意見を述べるつもりはビーブ牧師にはなかった。

「ほかのことはともかく、これに関しては男のほうが進んでいます。男は女ほど肉体を軽蔑しませんからね。だが男女が僚友になってはじめてエデンの園に入れるのです」(p.145、222頁)

肉体を軽蔑しない男女による僚友的關係、それを新しいエデン的な関係とエマースン氏は位置づけている。このエデンは、イギリス・ロマン派の詩人ウィリアム・ブレイクの神話に出てくる四重の霊的都市ゴルゴヌーザ(Golgonooza)のようなものとも言えよう。

ジョージから第二のキスを受けた後、ルーシーの置かれた状況はこう語られていた。「戻ってきた愛、肉体が必要とする愛、心が理想としてきた愛、われわれの会えるなかでもっとも真実のものである愛が、その愛が、敵となってふたたび現れたのだ。」(p.181、282頁)

この真実の愛を受け入れなさいと、エマースン氏は繰り返し説得する。

「・・・息子と結婚すべきです。人生とは何かを考えると、それから愛に愛が応えるのがどんなに稀なことなのかを考えると—あなたはジョージと結婚すべきです。世界が創られたのは、そういう瞬間のためなのだから」

ルーシーはエマースン氏の言うことが理解できなかった。まったく聞いたことのない言葉だった。しかしエマースン氏が話を進めていくに連れて、変化が生じていた。薄皮を一枚一枚剥ぐように闇が引いていった。彼女は自分の魂の底が見えてきたことを悟った。(pp.223-4、355頁)

ルーシーはようやく自分の本当の気持ちを理解し始める。しかし今さらどうにもならないと言って泣き始める。エマースン氏はそんな彼女を見て、「ああ、ルーシー、わたしがジョージだったら好かったのに。ジョージがあなたにキスをしていたら、それで勇気がでるだろう。あなたは暖かさが必要な戦いに、冷えた心で臨まなければならない」(p.225、358頁)と嘆く。しかし遂にルーシーは決意する。

「あなたがキスをして下さい・・・キスをして。
わたしはやってみせます」

エマースン氏によって、ルーシーは汚れた聖性が浄められたという感覚を得た。・・・エマースン氏は肉体から汚れを、世界の嘲りから刺を取り、直截な欲望の聖性を示してくれた。彼女は何年後かに語った。「決して完全には理解したわけではないけれど、まるで、すべてのものを一目で見渡せるようにしてくれた感じだったわ」

(p.225、359頁)

こうしてルーシーは、人生を見渡す眺めを獲得したのである。そして彼女は皆にジョージを愛していることを告白し、彼と結婚した。その最後の力を与えてくれたのは父親のエマースン氏のキスであった。キスは「直截な欲望の聖性」を示すシンボルであり、愛と情熱の旗印であった。ジョージは二度のキスによってそのことを彼女に示そうとしていたが、彼女はまだそれを認められなかった。エマースン氏の言葉で目を開かれたこのとき、彼女は初めて自分からキスを求め、そして受け入れた。肉体の聖性と、肉体が求める愛を受け入れたのである。

結び

こうして、この若さと情熱の讃歌は、ルーシーとジョージの新婚旅行で幕を閉じる。二人はペンション・ベルトリニの眺めのいい部屋にいる。曇りのない心で、人生を見渡せるようになったからである。この作品には、階級の問題、宗教の問題、変貌するイギリス社会の問題など、様々なテーマが含まれている。しかし、主旋律となっているのは若さと情熱の讃歌であり、肉体が求める愛と情熱の肯定であり、

「直截な欲望の聖性」の訴えなのである。それはやがて同性愛へと姿を変えて、『モーリス』に受け継がれてゆくテーマである。時に社会の規範をも超えてゆこうとする激しい情熱の主題であり、決して誰からでも祝福されるような、甘い愛でも穏やかな愛でもない。その激しさと厳しい道程は、ビーブ牧師に嫌われ、ハニーチャーチ家と疎遠になったルーシーとジョージの運命が、あるいは愛人アレクと共に英国社会から姿を消したモーリスの運命が、物語るとおりである。フォースターの肉体と魂を焦がした愛とは、そのようなものであった。

註

テキストには、E.M. Forster, *A Room with a View*, ed. Oliver Stallybrass, Penguin Twentieth-Century Classics (London: Penguin Books, 1990) を、引用のための翻訳としては E.M.フォースター『眺めのいい部屋』西崎憲・中島朋子訳(ちくま文庫、2007年)を用いた。引用頁数は、どちらでも参照できるように(原書、翻訳書)の順で両方記すこととした。

- (1) Yamuna Prasad, *E. M. Forster: Theory and Practice of His Novels*, 2nd ed., (New Delhi: Classical Publishing Company, 2004) の第三章 "Pattern" を参照されたい。
- (2) Lionel Trilling, *E. M. Forster* (New York: New Directions Publishing Co., 1965).
翻訳では、ライオネル・トリリング『E・M・フォースター』中野康司訳(みすず書房、1997年)。
- (3) Nigel Messenger, *How to Study an E. M. Forster Novel* (London: MacMillan Education LTD, 1991).
- (4) トリリング、134頁。
- (5) Messenger, p.58.
- (6) Messenger, pp60-61.
- (7) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎他共訳(大修館、1984年)
- (8) プルースト＝ラスキン『胡麻と百合』吉田城訳(筑摩書房、1990年)186-7頁。